様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：３４４２８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２９６５

研究課題名（和文）女が戦争を語るとき―ライフ･ヒストリーのなかの世界大戦―

研究課題名（英文）When Women Tell of War: The World Wars within Life History

研究代表者
林田　敏子（Hayashida, Toshiko）

摂南大学・外国語学部・教授

研究者番号：１０３４０８５３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は20世紀におこった二つの世界大戦を、戦間期を含めた一連の社会変動ととらえることで、大戦がジェンダー構造に与えたインパクトを長期的視野でさぐることを目的としたものである。両大戦期を生きた女性、なかでも軍事組織の末端を占めた「普通の」女性たちの大戦経験に焦点をあて、1930年代、50年代、70年代を画期とする「大戦の語り」の変遷と特徴を明らかにすることを試みた。個人の経験や語りが「戦後」という長い時空間のなかで記憶化・歴史化されるプロセスを、大戦像が構築/ 再構築される過程として歴史的に再考した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究がとくに注目したのは「普通の」女性の語りがもつある種の「破壊力」である。従来、大戦史は「男と女」「戦闘員と非戦闘員」「前線と銃後」など、さまざまな対立構図のなかで描かれてきた。戦場に足を踏み入れ、軍事組織の末端を担った女性たちの語りは、銃後にとどまった女性の語りとも、兵士の語りとも異なっており、典型的な「大戦の語りの型」に落とし込むことのできない要素を多分に含んでいる。多様性と両義性、そして矛盾に満ちた女性たちの語りの分析を通して、従来の研究とは異なる角度から、大戦像の構築 / 解体 / 再構築のプロセスに迫ることができた。

研究成果の概要（英文）：This study aims to use a long-term perspective to investigate the impact of the world wars and the interwar period on the gender structure during the 20th century, as a series of social changes. The transition and characteristics of the “women's narratives of the world wars” in the 1930s, 1950s, and 1970s were clarified, focusing on the experiences of women who lived during both wars, particularly the “ordinary” women who joined the armed forces. The process by which personal experiences and narratives have been remembered and historicised in the long space-time of the “post-war” period was historically reconsidered as a method to construct/reconstruct the current image of the world wars.

研究分野：イギリス近現代史

キーワード：西洋史　イギリス史　ジェンダー　第一次世界大戦　女性　語り　大戦経験

１．研究開始当初の背景

「大戦とジェンダー」を扱った研究の多くは、開戦から終戦までを一括りとして、第一次世界大戦と第二次世界大戦を個別に扱ってきた。むろん、両大戦の連続性に着目する「30 年戦争論」の影響をうけ、二つの大戦を視野に入れた研究も存在するが、その多くは第二次世界大戦に軸足をおいた発展史にとどまっており、戦間期を（第一次世界大戦の）「戦後」ととらえる視点は乏しい。また、近年活況を呈している第一次世界大戦研究においても、その考察対象が戦間期におよぶことは少なく、大戦が長期的スパンでみた「戦後」のジェンダー構造に与えた影響についてはほとんど論じられていない。

２．研究の目的

本研究は、第一次世界大戦と第二次世界大戦を、戦間期を含めた一連の社会変動ととらえることで、大戦がジェンダー構造に与えたインパクトを長期的視野でさぐることを目的としている。空白期間ないしは移行期間ととらえられがちな戦間期を広義の大戦史に組み込みつつ、考察の対象を 1970 年代まで拡大することで、二つの大戦を有機的に結合し、戦間期を含めた「戦後」のジェンダー構造の変化を女性の「語り」に注目しながら分析する。両大戦の連続性を前提に、戦間期を第二次世界大戦への準備・移行期間ととらえるのではなく、大戦前後の連続性と断絶性の双方に着目しながら、1930 年代（戦間期）、50 年代、70 年代という三つの画期をもつ「戦後」という時空間を、大戦像が構築 / 再構築される場として歴史的に再考した。

３．研究の方法

（１）女性軍事組織の比較検討

まずは、戦時に創設された女性組織の比較検討を通して、両大戦の連続性と断絶性を明らかにするとともに、戦間期を含む「戦後」のジェンダー構造の変化と大戦の関係性に着目しながら、「広義の大戦史」を考察する上での議論の枠組みを確定した。

本研究の主な考察対象は、両大戦期に陸海空軍の女性補助部隊や女性農耕部隊など軍事色の強い組織に入隊した女性たちである。総力戦に伴う組織的な女性動員は、従来のジェンダー秩序に少なからぬ脅威を与えたため、こうした組織に入隊した女性たちは、家庭や女らしさの規範から逸脱する存在としてしばしば批判の対象となった。戦時労働に従事しながら批判と監視の目にさらされた女性たちは自らの大戦経験をどのように受け止めたのか。彼女たちが書き残した日記や書簡、回想録、博物館によるインタビュー記録など、個人の「語り」の網羅的分析をおこなった。

（２）軍隊とセクシュアリティ

両大戦期の女性軍事組織では、女性隊員の性的スキャンダルが社会問題化するなど、ジェンダーとセクシュアリティをめぐる問題が噴出した。とりわけ第二次世界大戦期には軍隊内レズビアニズムという「新たな問題」もおこった。軍隊内の性、とくに同性愛をめぐっては、当時の性科学者の助言をもとに秘密裏に作成された対処マニュアルが残されている。このマニュアルを、当時影響力のあった性科学者の言説とあわせて分析することで、軍隊内のセクシュアリティについて考察した。

（３）ライフ・ヒストリーのなかの大戦

二つの大戦を経験した個人の「語り」に焦点をあて、女性の性モラルに社会の強い関心が向けられたことに注目しながら、両大戦の共通点と相違点を明らかにした。両大戦の社会的インパクトを長期的視野からさぐる上でも、また、大戦を生きた主体としての女性に迫る上でも、個人の経験（語り）に着目することは有効な手段となる。女性が書き残した回想録から浮かび上がる大戦像は、戦後の社会変化のなかでどのように変わっていくのか。1930 年代、50 年代、70 年代という三つの画期に注目しながら、女性の「語り」の変遷を考察した。

最初の女性回想録出版ブームが訪れた 1930 年代、第二次世界大戦直後の 50 年代、そして記憶の風化に対する危機感が高まり、あらゆる「語り」が反戦・非戦に回収されていく 70 年代。二つの大戦は一人の女性のなかでどのように位置づけられ、どう作用しあったのか。戦後の諸変化は大戦とどう結びつけて考えられたのか。二つの大戦を一つのライフ・ヒストリーのなかでとらえることで、大戦がジェンダー構造にもたらした影響を長期的視野からさぐった。

４．研究成果

（１）二つの大戦の連続性と断絶性

第一次世界大戦に関する近年の研究動向を網羅したうえで、二つの大戦の比較検討をおこなった。とくに従来のジェンダー概念から逸脱する要素をもつ女性軍事組織に焦点をあて、リクルートの方法や対象、命令系統、任務内容などの比較をおこなうことで、両大戦の連続性と断絶性を明らかにした。第二次世界大戦期のイギリスでは女性が徴兵法の適用対象とされた。いわゆる「女性徴兵法」はいかなる必要性のもとに導入されたのか。当事者である女性を対象に実施された意識調査と庶民院議事録を史料に、同法が成立するまでの議論のプロセスをたどることで、いかなる正当化の論理がもちいられたかを明らかにした。

次に、両大戦期の連続性と断絶性を明らかにするために、①二つの大戦を通して女性軍事組

織を率いた女性指導者と、②戦間期（1930 年代）に元軍人を名乗って男装し、偽誓罪で裁判にかけられた女性に関する事例研究をおこなった。

事例研究①
　両大戦期に陸軍の女性部隊の最高責任者を務めたヘレン・グウィン＝ヴォーンをとりあげた。軍や政府関連の公文書に加え、日記や書簡といった私文書を含む網羅的な史料分析をおこなうことで、二つの大戦が彼女のライフ・ヒストリーのなかでどのように位置づけられ、意味づけられたのかをさぐった。とくに第二次世界大戦中に彼女が事実上更迭されるまでの経緯を追うことで、二つの大戦期の「断絶（変化）」に迫った。

事例研究②
　女性による軍服の着用が一種の異性装ととらえられた戦間期に、男装して女性との結婚を試みたことで偽誓罪に問われたヴァレリー・バーカーを取り上げた。裁判記録や新聞のインタビュー記事をもとに、バーカーが自らの大戦経験をどう語り、社会がこれをどう受けとめたのかを分析することで、大戦とジェンダー、大戦とセクシュアリティとの関係について考察した。

（２）軍隊とセクシュアリティ
　「軍隊と性」をめぐる問題を、駐留軍のセクシュアリティ、軍隊内レズビアニズムという二つの観点からさぐった。前者に関しては、両大戦期のフランスやドイツに考察の対象を拡大することで比較史の観点を取り入れながら、軍とセクシュアリティをめぐる先行研究を批判的に摂取した。また、さまざまな国の軍隊が駐留したフランスのルーアンの事例を取り上げ、軍隊に属する多国籍（多人種）、多職種の男性たちが地域住民と取り結んだ関係をセクシュアリティの観点から考察した。さらに、第二次世界大戦期のイギリス陸軍で秘密裏に作成された軍隊内レズビアニズムへの対処マニュアルの分析を通して、軍が組織内の同性愛という問題にどう対処しようとしたかを分析した。兵士同士のホモソーシャルでホモセクシュアルな関係性についてはすでにすぐれた研究が存在するが、こうした軍隊内の性をめぐる問題にジェンダーという変数を組み込むことの重要性が明らかになった。

（３）ライフ・ヒストリーのなかの大戦
　両大戦期を生きた女性の経験に焦点をあて、1930 年代、50 年代、70 年代を画期とする「語り」の変遷をたどることで、個人の経験が歴史化されていく過程を明らかにした。「書く女性（writing women）」に焦点をあてた研究は 2000 年代以降さかんにおこなわれているが、銃後に留まることなく戦場に赴いた「普通の女性」に関する研究は立ち遅れている。両大戦期に軍事組織で働いた経験をもつ女性たちが帝国戦争博物館や陸軍博物館に寄贈した未刊行の回想録については、これまでエピソード的に触れられることはあっても、体系的な分析はなされてこなかった。本研究では、銃後にとどまった女性とも、戦時組織を率いたエリート女性とも区別される陸軍女性補助部隊の末端を占めた女性たちに焦点をあて、1930 年代から 80 年代にかけて執筆された未刊行の回想録を網羅的に分析した。執筆の動機やきっかけ、「語り」の内容・特徴に注目しながら、彼女たちが何を書き留めたい、書き留めなければならないと考えたのか、自らの大戦経験を時代やライフ・ヒストリーのなかにいかに位置づけようとしたのかを明らかにした。男性の「語り」やエリート女性の「語り」とは異なる彼女たち独特の「語り」から、支配的な大戦観やジェンダー観とは区別される「軍隊のなかの女性」としての自己意識や、どのような社会情勢とも折り合いをつけながら「大戦の記憶」とともに生きる姿が浮き彫りになった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　4 件）
(1)Toshiko Hayashida, ‘Women in Combat: Gender and the Armed Forces in Great Britain and Japan during the Second World War’, *ZINBUN*, no.46,2016, pp.161-178. 査読あり。

(2)林田敏子「「女性徴兵」はいかにして可能になったか―第二次世界大戦期イギリスにおける女性の軍事動員―」『女性史学』、第 25 号、2015 年、1-18 頁。査読あり。

〔学会発表〕（計　　件）

〔図書〕（計　3 件）
(1)藤原辰史（編）・林田敏子他『第一次世界大戦を考える』共和国、2016 年、269 頁（182-184 頁）。

(2)志村真幸（編）・林田敏子他『異端者たちのイギリス』共和国、2016 年、513 頁（112-135 頁）。

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。